リセット

peach-pit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リセット

【Ｎコード】
Ｎ２０３１Ｅ

【作者名】
ｐｅａｃｈ－ｐｉｔ

【あらすじ】
強盗犯によって殺された矢澤ナミは生まれ変わった。天使のツバサによって・・・。

Part1

「いやぁぁあああー・・・・!!」

私は・・・死んだ。

家に強盗が入ったのだ。

矢澤(やざわ)家に代々伝わる家宝・色々な種類の宝石を使った宝石箱を強盗犯は狙ったのだ。

私の父は誰にも分からない場所に隠したと言っていたので強盗犯は私達家族全員を殺した後も見つけられなかった。

どこに隠したのかは私にも分からない。

いったいどこに隠したんだろう?

絶対私が見つけてやるんだから!!

「んー・・・」

私は目を覚ました。

寝ている体を起こし、辺りを見回す。

ケド、白い空間・・・？

なに・・・ココ。

「辺り真白なんですけど～？！」

私の大声はこの白い空間に響き渡った。

はぁ・・・。

私はため息をつくと、その場に座り込んだ。

もう・・・どうなってんのよぉ～・・・・。

私の目には涙が溜まっていた。

もしかして・・・・。

私は死んじゃって行き場がなくて魂がさまよってるってことかな？

じゃぁこの体は魂？！

すごぉぃ・・・・。

「なーに泣いてんだよ」

急に聞こえた男の声。

その声は白い空間に響いていた。

ん?!

誰?

私は立ち上がり、辺りを見回す。

でも・・・声は聞こえるのに姿は見当たらない。

「ココだよ。こーこ!」

「きゃぁ?!?!」

目の前にいきなり現れた、謎の声の正体。

それは、ちょっぴりカッコいい男の子だった。

Part2

「あなた・・・誰？」

私の目の前に現れた男の子。

よく見ると、白い羽がついており、頭上には金のわっかが浮いている。

なんか・・・天使みたい。

「俺はツバサ。天使だ」

「へぇ～。やっぱり天使さんかぁ」

ん？！

・・・・

「て、天使?!」

「おう♪」

ツバサはにっこりと笑う。

天使って・・・やっぱり天使?

あーもう自分でも意味分かんない!!

私は頭をポカポカと叩く。

「おめー何やってんの?」

「え? いやっ。何にもないよ」

私は頭を叩いていた手を止める。

そして、苦笑い。

「そいやおめーの名前は？」

「私？私は矢澤（やざわ）ナミ」

「ナミ・・・」

ツバサは私の名前を聞いたとたん放心状態になってしまった。

「ツバサ？ツーバーサ！！」

「え？！あ・・・いや」

私の声で我に返ったのか、口を開いてくれた。

「・・・どうしたの？」

「・・・」

黙り込むツバサ。

「ツバサ？」

ツバサは私をじーっと見つめる。

そして私の髪をくしゃくしゃと撫でた。

「ちょっ！何す・・・」

「なんもねーよ！ばーか」

ペロッと舌を出し、ニッと笑うツバサ。

「・・・そーですかぁ！」

私は乱れた髪を丁寧にもどす。

もう！髪は女の命なんだからねっ。

「そいや・・・なんで私ってココにいるの？」

「それは・・・」

Part2ー(1)

ー「おめーの名前は？」「私？私は矢澤(やざわ)ナミ」ー

ナミ・・・。

思い出させんなよ・・・。ばか。

～3年前～

「ツバサ♪早く行こう！」

「おお」

俺は幼馴染の奈美(なみ)とデートすることになった。

俺は奈美(なみ)と恋人になったのだ。

「でね！佐上(さかみ)が先生に殴りかかったんだよ～？」

「マジで？やべえな」

俺はケラケラと笑う。

奈美(なみ)もクスクスと可愛らしく笑う。

かわいーなぁ。

俺達は信号の前に立った。

赤信号なので俺達は足を止める。

やっと青になり、歩きだす。

すると、向こうから信号無視の車が走ってきた。

「奈美(なみ)！！危ない！！」

「え？」

キキーッ

「な・・・な・・・」

「奈美(なみ)ぃー！！！！！！！！！！」

奈美(なみ)は車にひかれてしまった。

俺は急いで救急車を呼ぶ。

１０分後、救急車が到着。

俺と奈美(なみ)は救急車に乗り込み、病院に向った。

病院に着くと、奈美(なみ)は手術室に連れて行かれた。

2時間後、手術が終わったのか、先生が出てきた。

「先生!!奈美(なみ)は・・・奈美(なみ)はどーなったんですか?!」

俺は先生にしがみつく。

「残念ながら・・・」

先生はそこで言葉を止めた。

俺は・・・そこで泣き崩れた。

~現在~

なんでこんな時におんなじ名前なんだよ・・・。

ナミの顔見るたんびに思い出しちまうじゃねぇか。

俺って・・・運わりいなぁ。

でも・・・このナミも死んでんだよな・・・。

同じ運命たどるってやつか。

おしっ。コイツはちゃんとしてやっか！

まずは・・・テストだな。

ー「ツバサ？ツーバーサ！」ー

まさか・・・呼んでる？

やべっ。

ー「え?!あっ・・・いや」ー

Part3

「それは・・・。お前のテストをするためだ」

「テ・・・テスト?!」

な、なんなのテストって・・・。

私は目をパチクリさせる。

ツバサは空中に飛び上がった。

「さぁ!Ｌｅｔ' ｓ　ｔｅｓｔ!!」

ツバサがそう言うと、白い空間に映像が映し出された。

その映像は・・・私の殺された日だった。

「どうゆう・・・こと?」

「記憶力のテストだ」

「記憶・・・力」

『きゃぁ?!』

女の人の叫び声だ。

「さぁ。ココで問題」

ツバサの言葉と共に映像が止まる。

「この叫び声は誰でしょう?」

「・・・ミナお姉ちゃんよ」

「せいかーい」

また映像が動き出す。

『やだっ!やめっ』

お姉ちゃんにナイフが向けられる

『家宝はどこだ?!』

『知らないわよ!』

『そうか』

『いやぁ!!』

お姉ちゃんが殺された。

「・・・おねえちゃん・・・・」

私の目から涙が流れる。

こんなの・・・。

こんなの見たくないよ・・・・。

また映像が変わった。

『誰だテメー？！』

男の子の声だ。

「これは誰？」

「弟のナミキよ」

「せいかーい！！」

・・・。

こんなんで正解したって嬉しくないよ・・・・。

『うわぁ？！』

ナミキが殺された。

「もう・・・やだ」

「ん？」

「もうやだよ！！」

私の瞳から涙が次々とこぼれおちる。

「これ・・・なんの意味があるっていうの？！」

「お前の愛情テストだ」

「愛情・・・テスト？」

なにそれ・・・。

さっき言った”記憶力テスト”ってのは嘘だったの？

最低・・・。

「お前に家族への愛があるかどうかテストしてたんだ」

「・・・」

「ま。結果はありすぎってとこだな」

キッ。

私はツバサを睨みつける。

「ふざけないでよ！！」

私はツバサの頬を殴ろうとした。

でも、私の右手はツバサの右手によって止められた。

「そんなカッカすんな。俺だって・・・好きでやってんじゃねーんだよ」

「・・・。離してよっ！」

私は無理やりツバサの右手から離れた。

・・・もうやだ。

生き返りたい・・・。

こんなの・・・忘れちゃいたいよ・・・。

「ナミ。忘れてーのか？」

「え？」

「行き返りてーのか？」

何・・・それ。

私の心の声・・・聞こえてるの？

「そうだよ・・・」

私はつぶやいた。

「行き返りたいよ！もうこんな苦しいのやだよ！忘れちゃいたいよッ！！！」

私は叫んだ。

また白い空間に響き渡る。

「本当に・・・」

「え？」

「本当にいいのか？本当に忘れてもいいのか？」

「・・・」

忘れれば・・・楽になれる。

でも・・・家族みんなのこと・・・忘れたくない。

「どうする？」

「・・・」

私が忘れたら・・・みんなは許してくれる？

「・・・忘れる・・・」

「え？」

「リセットする！」

「・・・分かった」

ごめんね・・・みんな。

すると、私の体は光り出した。

「な・・・何コレ?!」

私は空中に浮かびあがった。

「元気でやれよ」

「え?!どうゆうー・・・」

私の体は消えていった。

Part4

「ん・・・」

私は目を覚ました。

私はベッドからおり、クローゼットにある制服を手に取る。

・・・そう。今日は学校なのだ。

私は制服に腕を通す。

・・・そういえば、今日変な夢見たなぁ。

なんか天使と話してた私がいたけど・・・何話してたんだろ。

なんにも聞こえなかったな・・・。

ま。いっか☆

私は制服に着替え、かばんを持ち、部屋を出る。

「ナミ」

私を呼ぶ女の人の声。

その声は姉のミナだ。

私は振り向く。

「何？おねえちゃん」

「今日学校？」

「うん」

何当たり前なこと言ってんの？

変なお姉ちゃん。

「そう。気を付けてね」

「はーい。行って来まーす！」

私はお姉ちゃんに手を振り、階段をおりる。

階段をおり終えると、トイレから弟のナミキが出てきた。

「あれ。姉貴もう行くのか？」

「うん。あんたも行きなさいよ」

「めんどいからサボる」

「はぁ・・・。まったく」

ナミキは毎日のように学校をさぼっている。

欠席日数を見るのが怖いよ。

「じゃね」

私はナミキに手を振り、玄関で靴を履き、家を出た。

私は学校に向って歩き出した。

その途中変な建物の前を通った。

そこは誰も住んでいない空家だ。

薄暗くてきみが悪い。

でも・・・なんだか懐かしい気がするのは・・・なぜ?

Part5

私は今、授業中。

なのに屋上にいます！

理由は授業に出る気がしないから。ただそれだけ。

はぁ・・・。

私はため息をつく。

「どう〜？楽しんでる？」

つまらなそうにしている私の前に現れた男の子。

白い羽がはえてて金色のわっかが頭上に浮いている。

こいつって・・・夢に出てきた天使?!

「あなた・・・誰?」

「俺のことまで忘れてんの?!まいったなぁ・・・。まーいいや。俺はツバサだ」

「私はナ・・・」「ナミだろ?」

な・・・なんで知ってんの?!

エスパー?

超能力?

「そんなことより、楽しい?」

「え?うん。楽しいよ」

「そうか・・・」

ツバサの表情がなんだか寂しそうだ。

どうして?

どうしてそんな顔するの？

ツバサには関係のないことじゃない。

「ンじゃ、元気でな」

「え。ちょっ・・・」

ツバサは空のかなたへ飛んで行ってしまった。

・・・なによ。

話ぐらい聞け。ばーか。

でも・・・なんで私のこと知ってたんだろ。

私は初対面なのに・・・。

・・・実は私の知らないうちにどこかで会ってたりして。

それはないか！

・・・じゃぁ盗撮とか？！

うわぁ・・・。

天使のくせに犯罪かよ。

・・・ってか、天使とかいたんだ。

そこがびっくりだよ・・・。

♪～キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

あ。授業終わりだ！

帰ろっと♪

Part5－(1)

アイツ・・・。

なんで俺のことまで忘れてんだ？

ちゃんとあの日のことに関することを忘れさせたはずなのに・・・。

まさか・・・。

おれもあの日に関係してるとか？

そんなはず・・・。

つーか。俺も記憶ねぇ・・・。

まさか・・・。

俺・・・。

アルツハイマー??!!

マジかよ・・・。ってそんなわけねーだろ!!

俺まだ若いし!

ってか、何自分で自分につっこんでんだよ俺!

バカだろ。

あほだろ。

はぁ・・・。

なんかナミが俺のことを忘れてるってやだな。

さびしい気が・・・。しねえよッ!!

ふんっ

あいつなんかもう俺には関係ねぇっつーの。

・・・。

はぁ・・・。

俺の強がり。

本当はさびしいくせに。

しゃーねぇ！

あいつの記憶、なんとかして戻すか！！

♪～キーンコーンカーンコーン

俺はチャイムとともに空へと飛びあがった。

俺が飛び上がった瞬間、俺の体が光り出した。

羽が消え、わっかも消えた。

どうやら俺は人間になるようだ。

俺は羽が無くなってしまったので、俺の体は落ちていった。

なんとか無事着地。

「おしっ！」

俺は学校の門へとやって来た。

ここであいつを待つか！

俺は門にもたれかかり、あいつを待つことにした。

あいつとは誰かはいずれわかることだ。

Part5－（1）（後書き）

前半のほう、ツバサの独り言になってすいません＞（＿＿）＜

Part6

「ばいばーい。ナミ」

「うん♪また明日ねー」

私は友達と別れ、校舎を出た。

すると、門の近くでみんながやがや騒いでしている。

しかも女子ばっかり・・・。

「どうしたのー？」

私は近くにいた女の子に聞いてみることにした。

「門のところにかっこいい男の人がいるんだってぇ。私も見たいけど見れないんだよねー」

「へぇー・・・」

なんでそんなかっこいい人がこの学校に来てるんだろ・・・？

誰かのお兄さん・・・とか？

私も見たいっ！

私は女子の塊に割り込んだ。

うっすらと見えた！

「あ！」

おとこの人と目が合った。

どんどん私のほうに近寄ってくる。

「待ってた。ナミ」

「へ？・・・えぇぇぇぇ？！」

なんで・・？

なんで私を待ってたの？！

しかもこの人なんで私の名前知ってんの？！

どこかで会ったのかな・・・？

ん？

さっきもこんなこと思ったような・・・。

あ！！

ツバサに会ったときだ！！

まさか・・・この人・・・。

「ツバサ？！」

「うん？そうだよ」

やっぱり・・・！！

「なんで私のこと待ってたの？」

「話は後だ。行くぞ」

ツバサは私の腕を掴み、走り出した。

たまっていた女子が邪魔だったけど、ツバサは簡単に通り抜けた。

やっぱり男だね・・・。

ツバサ。

・・・・なんだか、ツバサが懐かしく思えるのはなぜ？

Part7 ～Last～

私はツバサに腕を掴まれ、走っている。

「着いたぞ！」

走り初めて約1．5分、ようやくツバサの足が止まった。

着いたのは・・・あの気味の悪い空家だ。

「なんで・・・ココに？」

私が聞いてもツバサは黙っている。

・・・どうしたの？

すると、ツバサの体が光り出した。

ツバサの体から、白い羽とわっかが出てきた。

そして、天使の姿となった。

「ツバサ・・・？」

そして、ツバサが飛び上がった。

飛び上がった瞬間、私の体が光だした。

頭の中に映像が映し出される。

私の家族全員が殺される映像だ。

・・・なに・・・コレ。

・・・でもこの映像・・・見覚えがある・・・。

そうだ！私の家に強盗が入ったんだ！！

記憶が・・・戻った。

体の光がやんだ。

「記憶・・・戻ったよ・・・」

「そうか」

「でもなんで？！私はあのままのほうがよかったのに！」

私の目に涙がたまる。

「そんなの・・・お前の家族が許さない」

「・・・やっぱり？」

「ああ」

そっか・・・。

みんな・・・やだもんね。

「そいや。家宝のありか、分かったぜ？」

「え？！うそ！！」

「マジ。来いよ」

私はまたツバサに腕を掴まれ、家の中へと入って行った。

向かったのは、私の部屋だ。

「私の部屋・・・。なんで？」

「このクローゼットの中♪」

「え？」

ツバサはクローゼットを開け、奥の方に入っていた箱を取り出す。

この箱は鍵がなければ開けられないようになっている。

ツバサは鍵を手から取り出し、箱を開けた。

すると、家宝の宝石箱が入っていた。

「どうして？どうして鍵持ってんの？」

「俺は天使だぜ？出来ねーことなんかねーよ」

ツバサはペロッと舌を出し、ニカッと笑う。

私をツバサじゃなく、箱を見る。

箱はきらきらと光っている。

「どうだ？これで満足か？」

「うん♪ありがとう」

私の目から涙がこぼれおちる。

ありがとう・・・ツバサ。

Ｐａｒｔ７　～Ｌａｓｔ～（後書き）

最後なので長めにしてみました。

最後まで読んでくれてありがとうございました！

おまけ

「それよりさ。ツバサ」

「ん？なんだよ」

私はずっと聞きたかったこと言おうとしている。

それは・・・。

「どうして私が私の名前を言った時ボーッとしてたの？」

ずっと気になってた。

そのことが気になって気になってしょーがなかったのだ。

「そんなに聞きてーのか？」

「うん♪」

私今わくわくしてる。

早く聞きたい♪

ツバサは顔を近づけてくる。

へ？へ？へ？なんで？？

な・・・なんか照れるんですケド！！

顔！顔近いって！！

ヤバいヤバい！！

私絶対顔赤いって！！！！

ツバサの鼻と私の鼻がつきそうなくらいツバサの顔が近づいてくる。

・・・やめて！！

「やっぱやーめた♪」

ツバサはそう言いながら顔を離す。

「え？」

もしかして理由を言おうとしてたの？

なんだ。

でも・・・。

「なんで言ってくれないの？」

「めんどい」

はぁ？！

「いーじゃん！！」

「・・・しゃーねえなぁ」

ごく・・・。

私は唾を飲む。

「お前の名前な、俺が死ぬ前に好きだった奴の名前と同じなんだ」

「え？！」

好きな人いたんだ・・・。

「まぁあっちのほうの名前は漢字なんだけどな」

「・・・うん」

「んで、俺、そいつとデートしてたんだわ」

・・・デート。

付き合ってたってこと・・・？

なんか・・・ショックなんですけど。

「帰りに、交通事故にあっちまってそいつはこの世からいなくなっちまったんだ」

「・・・」

そんなことが・・・あったんだ・・・。

そりゃ・・・ショックだよね。

私は瞳から涙を流す。

・・・え？なんで泣いてるの？

「ナミ？なんで泣いてんだ？」

「分かんない・・・。私にも分かんない」

どうして？

まさか・・・奈美(なみ)さんが私に乗り移ってんの？！

こわぁ・・・。

「ナミ。お前は俺から離れないよな？」

「・・・うん♪」

あたりまえだよ。

私は絶対ツバサから・・・離れたりしないよ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2031e/

リセット

2011年1月5日02時55分発行